要領様式第２号

出 張 報 告 届

令和２年１１月１０日

吹田市議会議長様

会　派　名　　無所属クラブ

出張者氏名　　生野　秀昭　㊞

㊞

㊞

㊞

㊞

㊞

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

出　張　先	10/29　倉敷アイビースクエア（岡山県倉敷市） 10/30　岡山県倉敷市真備町		
期　　間	令和２年１０月２９日から　１０月３０日まで　２日間		
出張の成果	別紙のとおり		
備　　考		認印	会派代表者

吹田市議会事務局 '02.11.10 受付

令和２年１１月１０日

無所属クラブ　生 野 秀 昭

報 告 書

中核市サミット　２０２０　ｉｎ　倉敷

日　時　　令和２年１０月２９日～３０日
会　場　　倉敷アイビースクエア　（　岡山県　倉敷市　）
主　催　　中核市市長会　倉敷市

１日目　基調講演

講師　片田　敏孝氏　　東京大学大学院　情報学環　特任教授
演題　中核市が頻発・激甚化する災害から「生き抜く」ために
（内容）　本格的な人口減少と高齢化を迎えた我が国では、自治体が行政上の諸課題を的確に対応し、住民の暮らしと地域経済を守るための取り組みを進めていく必要がある。中核市には、各々の中核都市として、将来に亘って活力ある社会を維持していく役割が求められている。

一方で、近年、頻発・激甚化する自然災害によって、住民の尊い命や財産を失なうなど各地で甚大な被害が生じている。加えて、新型コロナウイルスといった新たな脅威を受ける中、中核市は、持続可能なまちづくりの基盤となる防災・減災に向けた取り組み、地域活性化のための力強いまちづくりを早急に進めて行かなくてはならない。

パネルディスカッション（第一会場）
議題　災害から「生き抜く」ためのまちづくり
コーディネーター　三村　　聡氏　　岡山大学　地域総合研究センター長
パネリスト　　木幡　　浩氏　　福島市長
市民ひとり一人が考えてもらうしかないと感じた。
〃　　清水　敏男氏　　いわき市長
事後処理は、期限を切って計画的に行わなければならない。
〃　　加藤　久雄氏　　長野市長
行政のリーダーシップの下、市民と共に取り組む課題。
〃　　新原　芳明氏　　呉市長
様々な媒体を活用し、迅速かつ正確に情報伝達の取り組み。

〃　　伊東　香織氏　　倉敷市長

中核市長として、お役所機能を発揮する。

コメンテーター　　片山　敏孝氏　　東京大学大学院　情報学環　特任教授

総括として、今後の防災は、行政と市民が一体となって広域的観点で取り組まなければならない。

２日目　行政視察

目的　災害からの復旧・復興のまちづくり

行先　真備町被災地視察(復興の取り組み)

平成３０年７月豪雨による甚大な被害から、現在、全国からの支援と住民の努力により、復興に向けた取り組みの実態を視察。

被災当時の状況や、復旧・復興を含めた経験を踏まえた取り組み、トレーラーハウスを活用した仮設住宅、河川の付替え工事、大規模な決壊個所の視察を行った。

真備支所

守屋　弘志氏（地元商工会会長・現倉敷市議）より、被災から現在まで、また災害の記憶を後世に伝える努力の説明を受ける。

中核市サミット倉敷に参加しての感想。

吹田市は、今年４月より中核市として昇格し、地方自治法により都市の規模や能力に応じた事務権限が、従来に増し強化されたことにより、地域の実情に合わせたまちづくりが行える観点から、出来る限り住民の身近なところで、安心して活力ある社会の実現を目指し行政を行うと云う地方自治の理念を実現しなければならない。

災害は忘れたころに来る、また毎回のことながら被害は「想定外」で起こっている現実から、限られた予算の中で未知の災害全ての対策、「公助」にはおのずから限界もある。今後は、突然の「想定外」の災害に備え、中核市として強化された権限の範囲に於いて、平時から住民ひとり一人の「自助」意識の向上こそが、最大の「防災・減災」に結び付くものと思われる。しかしそれは住民任せでなく、行政に与えられた「公助」としての責任として行わなければならない。

吹田市は、これまでにも交流都市と災害時における相互応援協力体制を築いて来たが、更に最も近い交流都市能勢町と、また「遠くの親戚より近くの他人」の例えの如く北摂７市とは更に強固に、そして今後は、中核市の仲間入りしたことにより、ＮＡＴＳ(西宮市・尼崎市・豊中市・吹田市)や全国の中核市との間での災害相互応援体制の構築に、限られた予算の中で最大効果の上がる備えに努力を注いで行かなくてはならない。